木村憲二先生を悼む

木村先生の追手門学院大学経済学部の在職期間は一年あまりと短かったけれども，私たちの先生に対する印象は非常に強烈です．なんと言っても，先生は人なつっこい性格で，教員，学生，事務職員誰彼となく親しく話しかけられ，その気さくな付き合い方によって皆んなから暖かく受け入れられていました．また，その会話はいつも軽妙で，ユーモアにあふれ，先生に一度接っした者は即座にその人柄に引きつけられる思いでした．先生の研究面での鋭さとは逆に，日常生活面での周囲の人たちとの接し方の，酒脱さと，シニカルさの，絶妙な取り合わせの妙は，普通の人ではちょっと真似の出来ない木村先生特有の人間味の豊かさの表れであったように思います．先生の，気取らず，悠揚迫らぬ態度は，私たちの目にはまさに大人の面影を抱かせるものでした．

木村先生のお名前で私自身すぐ思い出されるのは，ティントナー／木村憲二・村上雅子・高橋正訳，数理経済学と計量経済学の方法論（日本評論社），ファーグスン／木村憲二訳，微視的経済理論（日本評論社），ファーグスン／木村憲二訳，生産と分配の新古典派理論（日本評論社），塩野谷九十九・水野正一編，ミクロ経済学（第三出版），第6章所得の分配（木村憲二），木村憲二，所得と分配（日本評論社）などである．私は，直接先生にご指導を受けたわけではないけれども，私が経済学を勉強しかけた頃，これらの文献を手にし，それが今日の糧になっていることを思えば，間接的に私も随分と先生のお世話になっていることを思い知らされ

ます．直接お目にかかれた時間は少ないけれども，私にとっては一生涯忘れることの出来ないすばらしい先生です．私たちの前を急いで走り去って行かれた先生に深く感謝し，先生のご冥福をお祈りいたします．

経済学部長

渡　部　重　明

木村憲二先生を偲んで

遠　山　嘉　博

平成10（1998）年12月のある日，木村先生にかけた1本の電話から，じつに33年ぶりに先生とのお付き合いが再開されました．しかし，その喜びも束の間の2年余りの後，それは無残にも終わりを告げてしまいました．

先生と私とは，同じ関西学院大学の経済学部で学びました．学部時代は，学年が違ったので面識はありませんでしたが，お名前は存じ上げていました．『経友』という学部学生の紀要の第6号（昭和30年12月刊）に，私は4年生で初めて小論を発表しましたが，先生は3年生で早々と，「利子理論に於けるラーナー」と題した論文を書いておられたからです．大学院では少人数であることから，理論と政策に専門分野は異なりましたが，院生の研究発表会などで親しく議論を交わす間柄となりました．ただ，先生は昭和37年4月に早々と，名古屋の金城学院短大に職を得て，関学を後にされました．それ以降，愛知大学，国際基督教大学へと東漸されたことは伺っていましたが，専門の違いから学会でお会いするようなこともなく，30数年が過ぎ去りました．

平成10年の秋も深まった頃，私は大学院博士課程増設の責任者として，理論経済学のマル合教授の獲得に大変な苦労を重ねていました．文部省（現文部科学省）への申請の都合上，余す日もごく僅かとなったある日，一か八かで先生に電話しましたところ，全く偶然にも，先生が国際基督教大学の定年を迎えられる年であっ

たことから，その後ご就任の快諾を得られ，やがて文部省の博士課程設置認可につながるというまたとない幸運に恵まれました．

文部省に提出した先生の業績は，単著6冊，単独訳8本（上・下別冊が多く計12冊）に代表される立派なものであり，これまでの研究生活でのご努力がいかに大きいものであったかを如何なく物語るものでありました．当学部に着任されてからも，持ち前の明るい性格と悠揚迫らぬ姿勢と能弁（多弁?）でもって周りの人を魅了し，行政面でもこれから重要な役割を果たしていただけるものと期待が高まっていました．

ところが，平成13年4月のある夜突然電話があり，東大病院で手術を受けると伝えられました．その時の「せっかく採ってもらったのですが……」というお言葉が妙に気にかかりましたが，あんなにお元気な先生のことだからと，何ら深刻には受け止めませんでした．しかしながら，あれが先生との最後の会話となってしまいました．まことに痛恨の極みです．

4月29日の夜，国際基督教大学の礼拝堂でとり行われたご葬儀の際，祭壇正面に掲げられた先生のにこやかな遺影に接しても，まだ信じられないというのが，私の偽らざる気持ちでした．それは大阪に帰ってからも，しばらくの間続きました．「生者必滅，会者定離」――この世の無常をひとしお感じさせられています．

ここに，ご生前のご交誼と貴重なご貢献に衷心より感謝致し，先生のみ霊の安らかならんことをお祈り申し上げます．